関ケ原銘々伝

天下分け目の戦いで馬鹿を見た人、笑った人

小松島六合

ソフトバンク新書

著者略歴

小松島六合（こまつしま・ろくごう）

歴史エッセイスト

日々、歴史上の人物に思いを馳せて定説を疑い、時のかなたに躍動する有名無名の群像の真剣かつ波瀾に富んだ人生に触れることを喜ぶ。

ソフトバンク新書　172

関ヶ原銘々伝（せきがはらめいめいでん）

天下分け目の戦いで馬鹿を見た人、笑った人

2011年 9 月25日 初版第1刷発行
2011年10月17日 初版第2刷発行

著　者：小松島六合（こまつしまろくごう）

発行者：新田光敏
発行所：ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒106-0032　東京都港区六本木 2-4-5
電話：03-5549-1201（営業部）

装　幀：ブックウォール
地図作製：小酒井 澄
組　版：アーティザンカンパニー株式会社
印刷・製本：図書印刷株式会社

落丁本、乱丁本は小社営業部にてお取り替えいたします。定価はカバーに記載されております。
本書の内容に関するご質問等は、小社学芸書籍編集部まで、書面にてご連絡いただきますようお願いいたします。

© Rokugou Komatsushima　2011　Printed in Japan
ISBN 978-4-7973-6603-7

関ヶ原銘々伝

――天下分け目の戦いで馬鹿を見た人、ほくそえむ人――

小松島六合

ソフトバンク新書　172

常州大学图书馆
藏书章

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

はじめに

関ヶ原の合戦から、もう四〇〇年以上が過ぎ去った。歴史への関心が高い低いにかかわらず、東海道を旅する人は、「関ヶ原とはこんなところか」と一種の感慨を持ってその地を眺め、その空間を埋めたであろう東西両軍のおびただしい軍勢を想像する。江戸の昔から今日まで、「関ヶ原」への関心は続いてきた。

もちろん、たいていの人はその激闘の結果、徳川家康と石田三成のどちらの側が勝利したかを知っている。映画や舞台、本やテレビドラマで何度この戦いが取り上げられたのか、数える気にもならないほど、我々になじみの深い日本人の「過去」だ。

しかし、時間を巻き戻し、当事者たちの背後に立って、彼らの目に映る光景が「現在」なのだと想像してみれば、そこにはまだ勝者も敗者もなく、一人ひとりの意志と意欲が力強く脈打っているのがわかる。豊臣秀吉の天下統一によって、終わったかに見えた戦国の世がこのとき再び立ち現れ、実力しだいで領土をいくらでも切り取る事が許された。

彼らはそれぞれに、「結果はこのようであって欲しい」と望む心持ちのもとに、関ヶ原で、あるいはまた主戦場から遠く離れた地で、大きな地殻変動の予感に突き動かされたような行動を起こした。そこには立ち上がったものの数ほどの「思惑」が満ちあふれていた。

本書では、第一章の奥州の大名たちから順にその人物たちを南へたどっている。実際は数え切れぬほどの人物が関わり、躍動したのが関ヶ原の戦いだが、それを網羅するのは本書の任ではない。本戦参加大名たちを取り上げた第三章が必然的に紙数は多くなっている。また、それぞれの章扉に該当する地域・人物の大まかな見取り図を入れた。人名は、真田幸村・立花宗茂・黒田如水のように良く知られた名で記している。

本州の北の端から九州の南の端まで、広義の「関ヶ原」に参戦した人間たちの事情、背負った家の歴史、立ちふさがるライバル、近しい者との思わぬ軋轢（あつれき）など、正念場（しょうねんば）はその人を裸にし、本性をいやでもあらわに見せてしまう。歴史の面白さをどう感じるかは、人により千差万別だとしても、歴史は見るものに等しく自由な想像を許してくれる。だから、これは史学の立ち場から書いたものではとてもない。今日の定説が明日の発見によってやがて書き換えられる、それがまともな研究だ。しかし、いつの日か「関ヶ原」を戦った人

間たちに、あったとされるミスや裏切りが実はなかったことが明らかになったとしても、哀切な死は哀切で、果敢な一撃は永遠に天の一角を衝いて已まない。

物語は人の数だけある、ということを改めて知らされる「関ヶ原」をめぐる人々の物語に、日ごろ感じること、また時代は変わっても変わらぬものもある、といった私的な感想を加えて書き綴ったものが本書である。あの日「関ヶ原」で出会った人に良く似た人とさっきすれ違った、そんなふうに感じることは楽しい。芥川龍之介が言ったように、はるか昔に世を去った伝説の人物たちなのだが、「寒山拾得は生きてゐる」（「東洋の秋」）、私にもそんな気がする。

目次

はじめに　3

東西両陣営詳細図　10

序章　関ヶ原への道　13

第一章　奥州・関東の死闘　23

奥州・関東の戦況概略　24

伊達政宗——したたかな独眼竜の野心と戦略　26

上杉景勝——軍神の謎めいた後継者　34

直江兼続——上杉家の忠臣、奔走す　41

最上義光——はしごを外された陰謀家　53

佐竹義宣——家康挟撃を仕組んだものの……　59

津軽為信——義に厚き津軽家初代　66

蒲生秀行——名将・蒲生氏郷の倅の手腕は？　71

小野寺義道——最上憎しの思いで戦い抜く　75

南部信直、南部利直
——苦心惨憺を味わった名族の行く末　78

家康・秀忠の西上コース　83

第二章　風雲急を告げる中部　85
中部の戦況概略　86
真田昌幸、真田信幸、真田幸村
——武略の一門、それぞれの決断　88
前田利長、前田利政——亡き重鎮の息子たち　97
可児才蔵——笹の才蔵、奮戦す　102
富田信高の妻——女傑が守る安濃津城　106
第三章　決戦、関ヶ原　111
関ヶ原本戦の戦況概略　112
徳川家康——天下を取れたのはツキである　114
福島正則——何のために豪傑は奮闘したか？　125
池田輝政——運を最大限に活かした男の人生　129
黒田長政——稀代の策士を父として　133
細川忠興——ガラシャの夫、かく戦えり　138
田中吉政——人生を賭けた出世双六の上がりに　146
藤堂高虎——世渡り上手の才人の一生　150
山内一豊、堀尾忠氏
——叩き上げのしたたかさと二代目の素直さ　154
石田三成——西軍の中心人物の心中とは？　158
島左近——関ヶ原に消えた謎の忠臣　167
蒲生頼郷——三成家臣団の強さの象徴　171

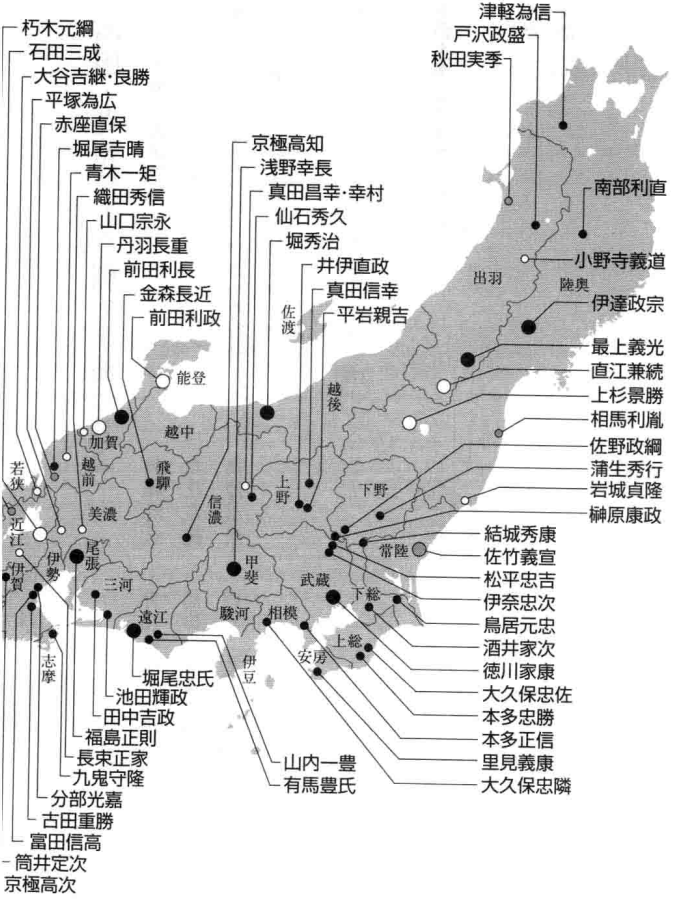
宇喜多秀家——関ヶ原後の長い余生 176
小西行長——国際人が見つめたもの 183
大谷吉継——三成の盟友、決死の合戦に臨む 189
小早川秀秋
——決めかねていた男が勝敗を決めた？ 193
赤座直保、小川祐忠、朽木元綱、脇坂安治
——それぞれの裏切り 200
島津義弘、島津豊久——世に名高い中央突破 205
吉川広家、毛利秀元
——大毛利の足並みの乱れ 210
長束正家——経済エキスパートの末路 216
安国寺恵瓊——戦国時代を代表する怪僧 220
長宗我部盛親——四国の御曹司の合戦人生 223

第四章 陰謀渦巻く上方・近畿 229
上方・近畿の戦況概略 230
毛利輝元——西軍の総大将であったはずが…… 232
淀殿、豊臣秀頼——運命に翻弄されて 236
北政所——秀吉の正室から見た関ヶ原 239
鳥居元忠——家康股肱の臣の激闘 242
木食応其——高野山のリーダーが説得に出座 246
今井宗薫、茶屋四郎次郎——豪商、暗躍す 250

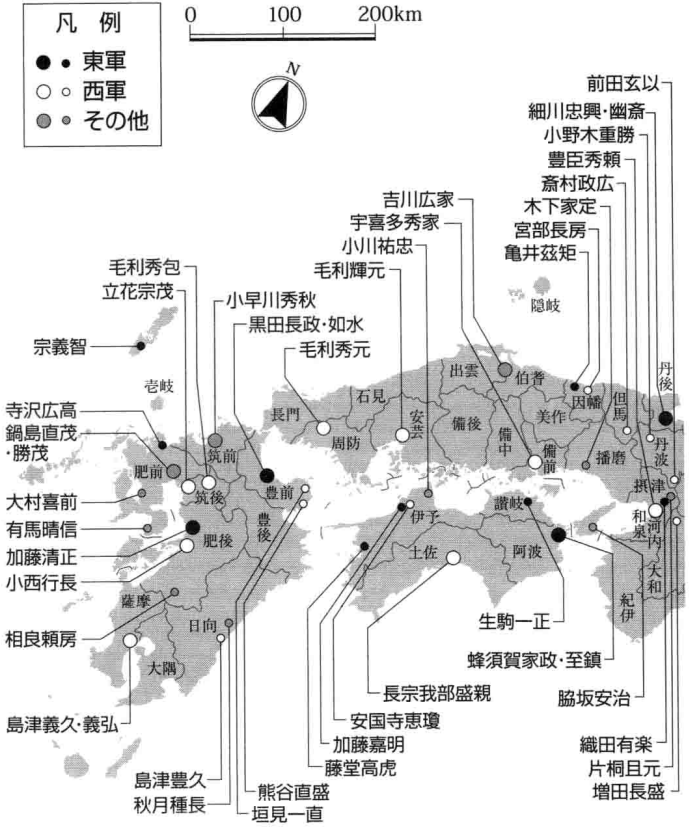
此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第五章　中国・四国・九州にも合戦の余波は及ぶ　257

中国・四国・九州の戦況概略　258
亀井茲矩——尼子の遺臣の活躍　260
蜂須賀家政——秀吉の忠臣の息子がとった行動　263
黒田如水——九州攻略の先にあったもの　266
宮本武蔵
——伝説の剣豪は関ヶ原にも参加していた!?　272
加藤清正——勇将の迷いと決断　275
立花宗茂——島原の乱までも生きた豪傑　279
島津義久——敗北、そしてその後　285
関ヶ原東西主要参戦武将人脈図　290
おわりに　291
主要参考文献　293

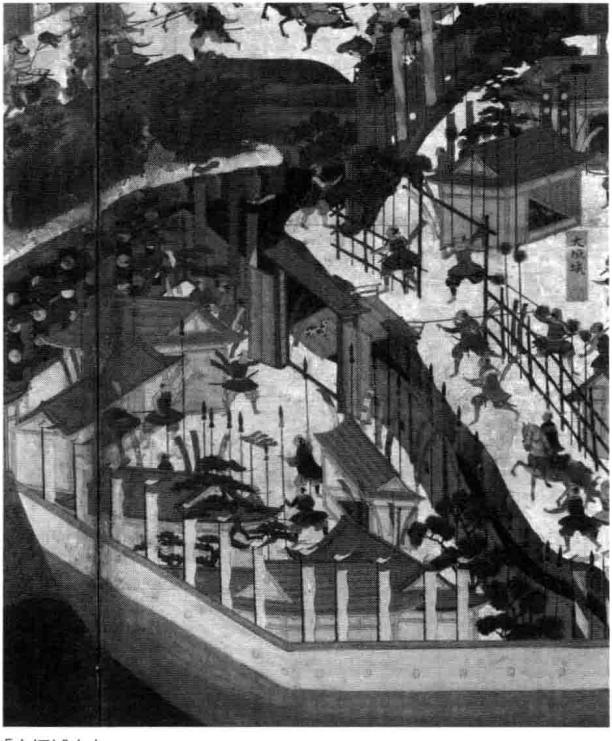

朽木元綱
石田三成
大谷吉継・良勝
平塚為広
赤座直保
堀尾吉晴
青木一矩
織田秀信
山口宗永
丹羽長重
前田利長
金森長近
前田利政
京極高知
浅野幸長
真田昌幸・幸村
仙石秀久
堀秀治
井伊直政
真田信幸
平岩親吉
津軽為信
戸沢政盛
秋田実季
南部利直
小野寺義道
伊達政宗
最上義光
直江兼続
上杉景勝
相馬利胤
佐野政綱
蒲生秀行
岩城貞隆
榊原康政
結城秀康
佐竹義宣
松平忠吉
伊奈忠次
鳥居元忠
酒井家次
徳川家康
大久保忠佐
本多忠勝
本多正信
里見義康
大久保忠隣
山内一豊
有馬豊氏
堀尾忠氏
池田輝政
田中吉政
福島正則
長束正家
九鬼守隆
分部光嘉
古田重勝
富田信高
筒井定次
京極高次
出羽
陸奥
佐渡
越後
能登
越中
加賀
越前
飛騨
若狭
近江
伊賀
伊勢
美濃
尾張
信濃
上野
下野
常陸
甲斐
武蔵
下総
三河
遠江
駿河
相模
上総
安房
伊豆
志摩

東西両陣営詳細図


凡　例
東軍
西軍
その他
0
100
200km
N
前田玄以
細川忠興・幽斎
小野木重勝
豊臣秀頼
斎村政広
木下家定
宮部長房
亀井茲矩
吉川広家
宇喜多秀家
小川祐忠
毛利輝元
毛利秀包
立花宗茂
小早川秀秋
黒田長政・如水
毛利秀元
宗義智
寺沢広高
鍋島直茂・勝茂
大村喜前
有馬晴信
加藤清正
小西行長
相良頼房
島津義久・義弘
島津豊久
秋月種長
熊谷直盛
垣見一直
藤堂高虎
加藤嘉明
安国寺恵瓊
長宗我部盛親
蜂須賀家政・至鎮
生駒一正
脇坂安治
織田有楽
片桐且元
増田長盛
隠岐
出雲
伯耆
因幡
但馬
美作
備後
備中
備前
石見
安芸
長門
周防
壱岐
筑前
筑後
肥前
肥後
豊前
豊後
薩摩
日向
大隅
伊予
讃岐
土佐
阿波
播磨
摂津
和泉
河内
大和
紀伊
丹後
丹波

序章

関ヶ原への道



「大垣城本丸」
写真：関ヶ原合戦図屏風（大阪歴史博物館所蔵）

豊臣秀吉の死が解き放った鬱憤

慶長三年（一五九八）八月十八日、豊臣秀吉が没した。朝鮮への派兵は中止となり、派遣されていた武将たちもただちに呼び戻された。石田三成や長束正家（なつかまさいえ）らの奉行たちは、秀吉の負の遺産というべき困難な撤収作業に必死に取り組んだ。

秀吉の子秀頼（ひでより）はいまだ幼く、秀吉の遺言もあって、政治は秀吉政権の実力者徳川家康を筆頭に、五大老・五奉行が中心となって行うことになった。

ところが、秀吉という頭の上の重石（おもし）が取れた家康が、天下の実権を自分が握ろうと動き出した。家康は、朝鮮に派遣されていた武将たちの撤退がほぼ完了した慶長三年十二月には、さっそく、伊達政宗や福島正則といった武将と親しく話をし、婚姻を急いだ。

大名同士が無断で婚儀を進めることは、豊臣政権では禁じられており、他の大老や五奉行から猛反対にあう。ところが、家康はこれを「媒酌人（ばいしゃくにん）が報じていると思っていた」な

どとかわし、逆に「自分を除こうとする言いがかりだ」と開き直ったりした。こうした行為や言動などから、反家康派の大名たちは家康に対しての警戒感を強めていった。

頼みの防波堤前田利家の死

家康に匹敵する豊臣政権内の実力者は、今や一人しかいなかった。秀吉の朋友でもあった長老前田利家である。利家は、家康の野望を見抜いて、他の大老・五奉行らとともに、家康への警告を行い、反家康派の拠りどころとして重さを増していた。

しかし、その利家が慶長四年（一五九九）閏三月三日、大坂城で没した。家康に対抗できる唯一の人物を失った反家康派は、真っ向から対抗する術がなくなり、家康の発言力はますます増大していったのである。

七将の石田三成襲撃事件

そんな折も折、前田利家死去の翌日、三成が武功派の武将七人（池田輝政、福島正則、細川忠興、浅野幸長、黒田長政、加藤清正、加藤嘉明）に命を狙われて襲撃されるという

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton